シリーズ 母の教え

人は3歳までに人格が形成されると言われる。その間に一番接しているのは母親。慈愛の心、人としての生き方、仕事への厳しさ……。特に子に対して深い愛情を注ぐ母親は偉大な存在だ。日本を代表する経営トップは母の生きざまから何を学んだのか。それを通じて現在の家庭教育のあるべき姿を考える。

「放任主義ながらも、『全力を尽くしなさい』という母の言葉はわたしの生き方の基盤になっています」

小学校時代、5年間に5回の転校を経験した井之上パブリックリレーションズ会長の井之上喬氏。幼い頃の転校経験は「まさに異文化コミュニケーションだった」と振り返る。学生時代に没頭した野球やインターハイまで出場した水泳での挫折も人生の糧にできたのは、母の教えがあったからといえる。

井之上パブリックリレーションズ
会長
井之上 喬
Inoue Takashi

官僚の父と気丈な母

わたしは9人兄弟の下から3番目の子どもとして、自由にのびのびと育てられました。戦前に1つ上の兄、戦後に弟が亡くなったため、実質的には7人兄弟の下から2番目です。

父・理吉は12歳で父親を亡くし、鹿児島から上京。苦労しながら勉学に励み、21歳で高等文官試験に合格。当時、文官試験合格者は官僚、もしくは弁護士になれたので、父は内務官僚として大連市副市長を務めていました。

母・順子は愛媛県の弓削（ゆげ）島という島で生まれました。直系ではないものの、先祖は海賊だったそうで、とても気丈な女性でした。海賊の血筋なのか、視野が広く、田舎の出身にもかかわらず、兄弟皆、東京の大学を卒業。兄が弁護士だった縁で父と知り合い、結婚しました。

わたしは父の仕事の関係で1944年大連で生まれました。

終戦後は家族全員無事に内地に戻ることができ、父は日本で役人を続けました。

転勤族で、香川県の高松の小学校を皮切りに、広島、福岡など、5年間で5回転校し、小学校5年の夏、東京・新宿の戸山小学校に落ち着きました。

子どもが7人いますから、引っ越しはもちろん日々の生活も大変です。そうした中、兄弟7人を大学まで通わせてくれた両親には、心から感謝しています。

当時の役人は、給料がそれほど良かったわけではありません。母は子どもたちの食糧を賄うため、公務員宿舎の庭で家庭菜園をして、キュウリやトマト、ナスにスイカやウリ、鶏まで飼って、わたしたちの食を守ってくれました。

大連で生活していたこともあり、母が作った豚まんじゅうは今でも忘れられない味です。

両親は上の兄弟には厳しかったものの、末っ子のわたしは放任でした。「これはダメ」「あれはダメ」ということは一切言われませんでした。

ただ、母がよく言っていたのは「何をやっても良いけれど、やるときは集中してやりなさい」ということ。全力を尽くして頑張りなさいと言われていました。

ですから、小さい頃から興味を持つことがあると、自発的にいろんなことをやっていました。

例えば、中学の時は野球。通っていた西戸山中学校は、当時、文武両道で有名な学校でチームメイトが2人甲子園に行っています。わたしは中学3年の春、病気で野球を辞めたのですが、母は、わたしのユニホームだけでなく、先輩たちのユニホームまで洗濯板で手洗いしてくれるなど、陰ながら応援し、支援してくれていました。

けれども、父も母も「こうしなさい」とは言わず、わたしの意思を尊重してくれました。

中学3年の春、戸山から三鷹に引っ越したのですが、三鷹から戸山高校に通うと通学が大変なので立川高校に進学。立川高校は当時、有名な進学校で、わたしも頑張って勉強しました。

ただ、役人になろうとは思いませんでした。気丈で実業家タイプの母は、父とけんかをすると、必ず「あなたは役人で安月給だから！」と父に失礼なことを言っていたからです（苦笑）。

父は審議官でしたが、「事務次官にはなれないから」と早期退職し、弁護士を開業していましたが、母がけんかの度に「役人だから！」と言っていたので、役人になるという選択肢は生まれませんでした。

ですので、必然的に民間企業で働きたいと思っていました。

高校時代には、水泳を始めました。中学時代に野球で鍛えた足腰のおかげで飛躍的に記録が伸び、オリンピック選手を目指して、高校2年から早大稲泳会に通い始めました。

早大稲泳会はオリンピックの銀メダリスト、山中毅選手が所属していた名門です。学校が終わると練習場の東伏見プールに通い、家に帰ると受験勉強をする生活でした。

水泳では、インターハイ関東大会まで出場しました。

ところが、コーチに当時流行っていた米国流のクロール泳法に改造させられてから記録が伸びなくなってしまいました。

受験のため、朝3時頃に起きて勉強していたので、精神的にも肉体的にも疲れてしまい、水泳を諦めることになりました。

山中さんに会えるかもしれないと思って入会した稲泳会でしたが、結局、お会いすることはできませんでした。

水泳は欧米人など身体の大きな選手が強いので、世界記録保持者の山中さんも大柄な方だと思っていました。ところが晩年、お会いした山中さんはわたしよりも小柄でした。もし高校時代、山中さんにお会いできていたら、諦めずに水泳を続けていたかもしれないと思います。

ライフワークのパブリック・リレーションズ

放任主義の両親のおかげで、学生時代、やりたいことに全力投球することができました。

また、その経験を通じて学んだことは「人生はいろいろな局面があるが、その経験があって、今の自分がある」ということ。

例えば、6つの小学校に通ったおかげで、小さな頃から異文化を経験することができました。パブリック・リレーションズというのも「いかに異文化と

シリーズ
母の教え 第129回

いのうえ・たかし
1944年11月旧満州・大連市生まれ。68年早稲田大学商学部卒業後、日本楽器製造（現ヤマハ）入社。70年井之上パブリックリレーションズを設立。以来、インテルやアップルを始め、国内外の企業・政府機関・団体のPRコンサルテーション業務を手掛けてきた。2009年早稲田大学大学院公共経営研究科で博士号を取得。2004年から早稲田大学に始まり、京都大学経営管理大学院など複数の大学で「パブリックリレーションズ論」の教鞭を執る。

シリーズ 母の教え 第129回

うまくやっていくか」ということです。今のようなグローバル時代、異文化コミュニケーションは重要なテーマです。

引っ越しは悲しいものでしたが、幼い頃から異文化を経験をできたことは、人生の糧になったと思います。

野球を続けていたら、もしくは水泳を続けていたら、別の人生があったとも思います。そう思うと、まさに「人生いろいろ」だと思います。そう考えると、今の日本に重要なのは「どんな職業でも誇りを持てる子どもを育てる」ことだと思います。

AIの時代、記憶力が勝負の時代は終わりました。それよりも思考力、論理力、コミュニケーション力、あらゆるリレーションシップ・マネジメントが重要な時代になっています。

大正12年に撮影した高等文官試験合格の記念写真。椅子に座っているのが父・理吉さん

母は、88歳で倒れ、96歳で亡くなりましたが、叔母いわく、わたしは母に「とてもよく似ている」そうです。

母は三味線からお琴、詩吟、畑仕事や裁縫まで、あらゆることをこなしてしまう女性でした。

そんな母に対し、子どもながらに「ありがたい」と思ったことがあります。

兄弟がたくさんいると、下の子はお下がりを着ることが多いものですが、わたしはお下がりを着た記憶がありません。母は手先も器用だったので、手編みのセーターやミシンで洋服を作ってくれていたからです。

流行を取り入れた洒落た服を作ってくれたので、当時、着ていた服を今でも覚えています。

父とのけんかでは気丈さが前面に出ていた母ですが、良妻賢母の母だったと思います。

ちなみに、母の戸籍上の名前は実は「つるゑ」と言います。

ところが、父がその名前があまり好きではなかったようで「順子」という名前にして、父はいつも母を「順子、順子」と呼んでいました。

気丈な母にも従順なところがあるのです（笑）。

大人になって、親としてではなく、いち人間として母を見ると、事業家にしたいくらいの人でした。各地を転々としていましたから、子育てや生活を親戚に頼ることもできません。そうした中、7人の子どもたちを立派に育て上げました。

井之上さんが中学3年生の頃、三鷹の自宅で。写真左から、二女の姉・正子さん、妹・悦子さん、井之上さん、母・順子さん、長男・隆道さん。井之上さんが着ているVネックのセーターは、順子さんの手作り

放任の子育てでしたが、一方で自己責任の意識をしっかり植えつけてくれました。あれこれ口を出したり、腫れものに触るようなことは一切なく、自立できる大人に育ててくれました。

わたしはライフワークとして今の仕事に取り組んでいます。

民族や文化、言語、宗教、国境を超えてステーク・ホルダー（利害関係者）とのリレーションシップ・マネジメントを実践するパブリック・リレーションズは、グローバル社会の今、ビジネスだけでなく、教育においても必要な概念だと考えます。

これからも、これまでの経験を活かし、活動を続けていきたいと思っています。